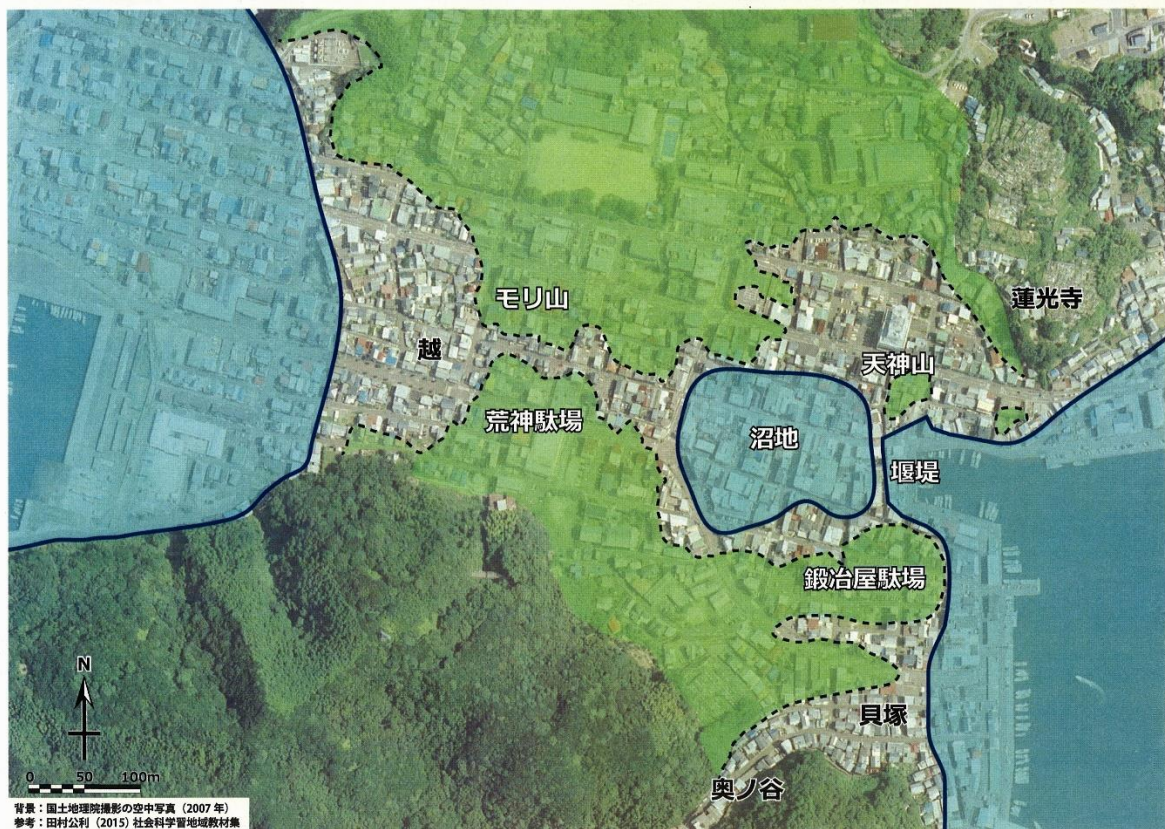


## — 現在の土佐清水市街地地形から旧地形を読む —

1800年代に描かれたと推定される高知県立歴史民俗資料館所蔵「清水図」を観察すると、現在の中央町・本町・栄町付近に塩浜が形成されている。元々は西側に象潟があり、奥まった低湿地であり、南北東から水が溜まり、東側の天神山（微高地）と鍛冶屋駄場（尾根筋）の間から象潟一帯に溜まった水が捌けていった。

天神山と鍛冶屋駄馬の間に堤を設け、海水の流入を閉ざし、そこに江戸時代の末頃に塩浜を形成した。浦尻在住郷土で清水港口の警備に当たった上原九郎右衛門の提案を当時の土佐藩浦奉行谷真潮が実行したものである。これにより土佐藩全体の10%にあたる約700石の塩が生産され、下田港（四万十市）に集積され、北幡多地域に中村の廻船商人たちにより運ばれた。

この塩浜は、明治7年（1874）まで使用され、その後に閉田された。そのときの推定地形が下図である。モリ山と荒神駄場の尾根筋が互いの頭を突き合わせるように迫り、越浜と清水浦を隔て、その幹道を狭窄していた。中世・土地の豪族加久見氏によって中国との交易を行っていた越浦は、加久見川の砂礫に堆積が増え、近世にはその港湾機能が失われ、港湾の主流は、清水浦に次第に移っていく。



近代初めの土佐清水市街地推測図（航空写真を加工して作成）

この塩浜を埋め立てたのが、現在の香南市夜須町から移住してきた事業家・上田亀之助である。明治40年(1907)から大正末まで市街地造成事業は展開される。戦後、昭和29年に下ノ加江町・清水町・三崎町・下川口町の四町が合併され、人口約34,000人の土佐清水市が誕生する。第1次都市計画(昭和29~40年)、第2次都市計画(昭和41~50年)、第3次都市計画(平成2年~)を経て、現在の土佐清水市街地が形成された。これについて、詳しくは『新市史』の第5章近現代・第8節で述べる計画である。

## 外科医・伝説の俳人 細木 大三郎

昨年度末から「細木大三郎」という人物についての問い合わせが何件かあった。旧中村町出身の医師であり、土佐清水市で開業していたということ以外、その人物を紐解く資料は見当たらなかった。

わずかに、故中村春利先生から譲り受けた亀井釣月著・沖本樵児補註『補註幡南探古録』の巻末に「細木大三郎 医学博士 土佐清水市清水 細木外科」と記載されているだけである。現在その全容はベールに包まれている。

市史編さん室への問い合わせ側からの情報から、この細木大三郎氏についてのNHKのテレビ番組が制作される予定であることが分かった。旧姓は鎌田で細木家に養子に入る。旧制中村中学校・旧高知高等学校・京都帝国大学医学部を卒業(昭和15年)し、海軍軍医大尉、復員後に養子となった細木病院で外科医・医学博士となる。昭和26年より佐川高北病院外科部長・院長、昭和31年より土佐清水市で細木外科病院を開業する。昭和45年8月28日行年56歳の若さで逝去した。(西村光一郎氏資料より)

この細木大三郎と交友があった土佐清水市郷土史同好会・西村光一郎氏が「土佐清水市郷土史同好会7月定例会」において、「外科医・伝説の俳人 細木大三郎」との演題で下記日程・場所で行います。興味のある方はどうぞご拝聴を。

(場所) 土佐清水市立中央公民館3階・多目的ホール

(日時) 7月17日(土) 9:30~10:30(質疑を含む)

(演題) 「外科医・伝説の俳人 細木大三郎」

(講師) 土佐清水市郷土史同好会・西村光一郎 氏

**【編集後記】** 今日、第5章近現代の第5節「土佐清水市民の海外移住」について特別に執筆していただいている吉尾寛氏(高知大学シニアプロフェッサー・元人文学部長)から「担当部分の原稿がもう1週間くらいで仕上がる」と市史編さん室に電話をいただきました。主に昭和初期の土佐清水市域住民を含む高知県民の台湾漁業移民の歴史について執筆していただいております。吉尾氏は本研究の第一人者であり、執筆いただけることが編さん室としてもうれしく、楽しみです。他の編集委員皆様におかれましても、蒸し暑い日が続きますが、原稿提出をよろしくお願いいたします。(田村)